番号	5 － 4	申　請　者	看護師 長谷　歩美

【審査申請課題】

転倒予防を目的とした履物についての入院時オリエンテーションの実態調査

【審査課題の概要】

転倒・転落の発生は、外傷・骨折の原因となるばかりでなく、回復の遅延・疼痛の増強・安静度の制限・ALD(Activivies of Daily Living)の低下に繋がり、入院期間の延長となる危険性が高い。また、身体的な外傷がなくとも転倒を経験することで転倒に対する恐怖感が残り、能動的な行動から逃避してしまうことで自己効力感の喪失やQOL(Quality of Life)の低下が引き起こされていることも指摘されている。特に在宅復帰を目指す地域包括ケア病棟においては、転倒予防は大きな課題である。高齢者の転倒を予防する方策は人的な支援以外にも薬剤の変更や歩行訓練・ベッドの高さ調整や杖・歩行器や車椅子の利用など多岐にわたる。なかでも高齢者の生活では、外的要因のひとつである履物は、姿勢やバランスに大きく影響し転倒の関連因子とされている。

A病棟の患者の履物に着目すると入院時に「スリッパ」を持参していたり、踵のある履物(靴)を選択していても踵を踏みつけた状態で着用していたりする場面を多く見かける。A病棟で発生した過去3年分の転倒インシデント報告書を遡ると入院早期にスリッパ使用中の転倒で骨折した事例が発生していた。さらに、履物について未記入である転倒インシデント報告書もあり、スリッパを着用中に転倒した事例は他にもある可能性が高い。

以上のことから、看護師は入院時のスクリーニングで転倒危険度についての認識は高くても患者の履物についての認識は低い可能性があると考えた。入院時のオリエンテーションで行うべき「すべりにくい履物の使用」に関する説明が正確に行われていない、または患者・家族に十分に理解できるような説明ができていないことが推測される。先行研究においても、転倒予防に関し「履物は入院時の説明と入院中の注意喚起を行うことで比較的容易に介入できる」と述べられており、入院時オリエンテーションの充実が転倒リスクの低減に寄与できる。しかし、入院時オリエンテーションを行う病棟看護師の履物に関する認識や具体的な指導方法についての研究は見当たらなかった。そこで、本研究の目的は、入院時オリエンテーションで転倒予防策として看護師が患者の履物の選択指導の具体的内容を調査する。本研究の結果から、履物が要因となる転倒リスクの低減に寄与できると考える。

審査結果	条件承認　（　令和5年4月26日　）